

村田数之亮先生を偲ぶ



な損害を受けたために、先生は大学生時代から京都大学の研究設備、図書を利用されたという。

卒業と同時に故郷に新設された舞鶴中学の非常勤講師に就任、年齢のさして違わない生徒を相手に二年間教鞭をとられたが、その間、大類伸教授にすすめられ、昭和二年に雄山閣から『ギリシア史』を出版、これが先生のギリシア史についての最初の出版である。

中学の非常勤講師を辞任後、昭和三年五月から昭和十年まで京都帝国大学大学院に籍を置き、指導教官、浜田耕作教授の下で古代ギリシア史を研究、『史林』誌上に古典時代に関する論文「ギリシア史におけるエーゲ海権」その他を投稿されていたが、やがて昭和八年度から十一年度まで関西大学予科、昭和十年度には大谷大学、京都大学の非常勤講師として西洋史の講義を担当されるようになった。

本会顧問、大阪大学名誉教授、元甲南大学教授、村田数之亮先生は平成十一年一月二十日、京都市内の病院で肺炎のため逝去された。享年九十八歳。ここに謹んで哀悼の意を表する。先生は明治三十三年（一九〇〇年）十一月三〇日、京都府東舞鶴市に生まれ、旧制宮津中学、第七高等学校を経て大正十二年東京帝国大学文学部西洋史学科に入学、大正十五年に同学科を卒業された。入学後まもなく関東大震災が起こって東大の研究室、図書館が甚大

そして、並行して浜田耕作教授と共著の形で平凡社刊、世界歴史大系の中の一冊として『エーゲ文明史』を発表された（昭和九年）。これを機会に先生は、シュリーマン、エヴァンズらの業績で新しく世界の注目を浴びたエーゲ文明の研究に向かわれ、昭和十一年七月にドイツのミュンヘン大学に留学、主にワルター・オットー教授とエルンスト・ブショール教授の講義を受講された。と

くに美術史のブショー教授の名が先生のその後の研究発表にたびたび登場することになる。

ミュンヘンを足場にギリシアへの研究旅行やスイスのアルプス登山を楽しまれていたがドイツでのナチスの台頭を見て、昭和十四年一月アメリカ経由で帰朝された。

翌年、昭和十五年三月から二十三年三月まで京都帝国大学文学部講師、二十四年度には京都大学文学部講師（専任）として講義を担当されたが、同年、大阪大学に文学部が新設されるとその教授となり、三十九年三月定年退官されるまで研究と講義をつうじて多くの学生に感銘を与えられた。傍ら、非常勤講師として東京教育大学、名古屋大学、広島大学などに出向されている。その在任中、昭和三十一年付属図書館分館長、三十三年評議員、三十五年文学部長などの要職に就任、大学行政に多大の貢献を果たされ、退官とともに大阪大学名誉教授の称号を受けられた。

そして、引き続き甲南大学教授に招聘され、昭和四十九年三月まで在職された。これら長年の功績によって勲三等瑞宝章の叙勲を得ておられる。

さて、前述のドイツ留学から帰朝されてから相次いで発表されたエーゲ文明とギリシア美術に関する著作は、いずれも当時の古代史学界では新鮮かつ画期的なものであった。ことにシュリーマ

ンとエヴァンズによって十九世紀末から二十世紀にかけて発掘されたエーゲ海文明は日本では未知の研究領域であって、村田先生の研究発表によって初めて学問的に紹介されたと言える。

クレタ島の宮殿の宗教的性格の濃い遺跡、遺物からその支配者の実態に迫った「クレタのプリーストキングに就いて」（『西洋史説苑』第一輯、昭和十六年）、ミケーネ独自の宗教、社会がつくりだした現象として説いた「ミケーネ的英雄崇拜について」（同上第二輯、昭和十九年）などはわが国エーゲ文明研究の事実上の出発であった。

第二次世界大戦の混乱のなかでも先生の研究は絶えることなく続けられ、リュックサク中であって空襲から守られた「エーゲ文明研究発達史」、「クレタ文明の性格」などの草稿は前述諸論文の加筆原稿とともに、戦後の昭和二三年出版の「エーゲ文明の研究」となって結実した。わが国古代史学界はこれによりクレタ、トロイ、ミケーネなどエーゲ海文明の全貌を学問的に知ることができたのであり、この業績にたいし、京都大学は文学博士の称号を授与した。

戦後の出版の復興期に刊行された百科辞典、世界美術全集のエーゲ文明の項はどれを取っても先生の執筆で占められた程である。また、シュリーマンの自伝の翻訳『古代への熱情』（岩波文

庫、一九五四年）は多くの若者を鼓舞し今なお愛読され続けている。

しかし、先生が一貫して追い求められたのは「ギリシア美」であった。すでに昭和十五年、『史林』（二五巻、二一、三号）に「ギリシア・クラシックの本質とその表現」（一）（二）の連作を発表され、又、同年発行の『希臘美の性格』（弘文堂）は文庫本の体裁の中にギリシア人の美学、建築、彫刻、瓶絵にいたる調和のとれた叙述が凝縮して好評を博した。さらに「ギリシア幾何学様式の問題と史林」（二七巻二号）『ギリシアの瓶絵』（大八洲出版、一九四二年）や論文「E・プシヨの近著に就いて」（「J・ヴィンケルマンとH・ブルン」（いずれも『西洋史学』十二、二一号）、『ギリシアの陶器』（中央公論美術出版、一九七二年）などギリシア美の研究が進み、それが大著『ギリシア美術』（新潮社、一九七四年）に集大成された。これは研究発達史、ギリシア人の美意識、エーゲ美術、古典美術、ヘレニズム美術の全領域を含み、高度な研究必携書をつくらうと目指した先生の意図が見事に実現したものである。先生の美術史の特色は単に様式や技法のみでなく、できるだけ、当時のオリエント、エーゲ海、ギリシア本土の文明圏相互の影響、社会のあり方などの多方面からギリシア美の根源、ひいてはギリシア古典の精神を究めようとし

たところにある。

先生はよく「私は職人だよ」と一種の誇りをもって言われた。一定の時間がくれば仕事場に入り、創作過程でインスピレーションを得るといふ芸術家に似た日常生活を实践、続々と著作を世に出された。『英雄伝説を掘る』（新潮社、一九六九）、『私のギリシア』（新潮社、一九七六）その他、味のある文章で書かれたギリシアの発掘物語、史蹟解説、旅行記、翻訳などがその中から生まれたのである。芳留子夫人に先立たれたのちも、子息の心配をよそに独居を続けてその仕事の態度を崩すことなく、九十七歳の誕生日を迎えて新しい論文「ギリシア彫刻の誕生と達成——アルカイック——」を出版、ご逝去直前にはその続編をほぼ完成して、周囲の人々に感銘を与えられた。

先生は又「私はエビキュリアンだよ」とも言われた。山を愛し、ユーモアと警句を發しつつ悠々と学問と美の世界を探索し、赴くままに史学研究会、日本西洋史学会、日本西洋古典学会、美術史学会、日本考古学協会などに名を連ね、乞われれば委員となり、広い分野の研究者、芸術家との交流を楽しまれた。まことに豊かな学究生活であった。天寿とはいえず、百歳を目前に急逝されたのはかえすがえすも残念である。ご冥福を祈る。

（衣笠 茂 記）